

・・・子どもの頃の稲刈り風景・・・

私の小学時代（昭和40年代）が、「米」（いわゆる88の作業をこなす）の意味するところの農作業の最後だったように思う。

農業の機械化がじわじわ押し寄せていたのだった。

耕耘機からトラクターになり、天日干しから乾燥機に変わりつつあった。そして、田植機やコンバインへと一気に機械化が定着したのだ。

当時、稲刈りが始まると、一週間学校は休みになった。子どもも重要な労働力だった。

家族5人で稲を刈る。3列を受け持ち、3株ずつ交互に重ねては藁で縛っていく。朝早くから夕方遅くまで刈り続けても、2反ぐらいなものだった。その作業が1月以上も続く。

その間に、天日干し用の「はさ（稲架）」をつくらなければならない。

「はさ」とは、支柱を立て横棒や綱を張って、そこに稲束をかけて乾燥させるものだ。

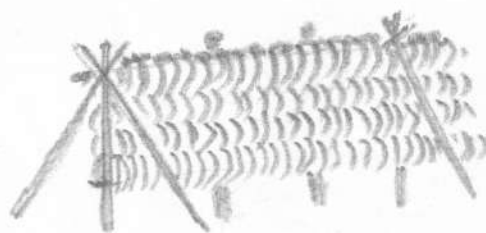
はさづくりは父の仕事だ。重労働で手間がかかるからだ。

まず、1メートルぐらいの木の杭で穴を開ける。もちつきの杵のような木槌を振り上げる。その穴に、3メートルぐらいの細長い丸太を立てる。1間かんかくで10本ほど立てる。今度は横棒を上下に固定していく。その間に、縄を5本張っていく。さらに、補強の丸太を3間かんかくで斜めに立てていく。縄も、支柱ごとに縛り付けていく。この時使う縄は、雪降る間に藁を柔らかくして機械で作っておいたものだ。細い縄は、丸太や綱を縛るもの。太くなった縄ははさ掛けようだ。

こうして出来たはさに、稲束を運んで掛けていく。遠くにあるものは馬そりで集めてくる。

はさ掛けは、夕方から始まる。低い所は子どもでも出来る。高いところは、父が台に乗り、そこをめがけて稲束を放り投げてやる。牛歩のごとく進む作業、夕暮れは早い。満月の下での作業は、気持ちが明るくなる。家族がいっしょにいる安心感か、辛いことを忘れて、むしろ幸せを感じたことを思いだす。

この「はさ（稲架）かけ」の複雑で多岐にわたる作業は、倅あみでもおじだった。寒い納屋で、一日10枚がやっとだ。それを200枚はあむ。そのふた（蓋）は400枚、縄は30巻。1年中何かの農作業に追われていた当時を思い出すと、田植機・トラクター・コンバインの出現は、農作業を軽減させた。が、農家の生活は豊かにならず機械の負担が重くのしかかってきた。



はさ（稲架）かけ風景